かつて多くの船が行き交っていた兵庫津。最近は遊歩道やショッピングモールが整備され、親水空間に生まれ変わった＝神戸市兵庫区、新川運河

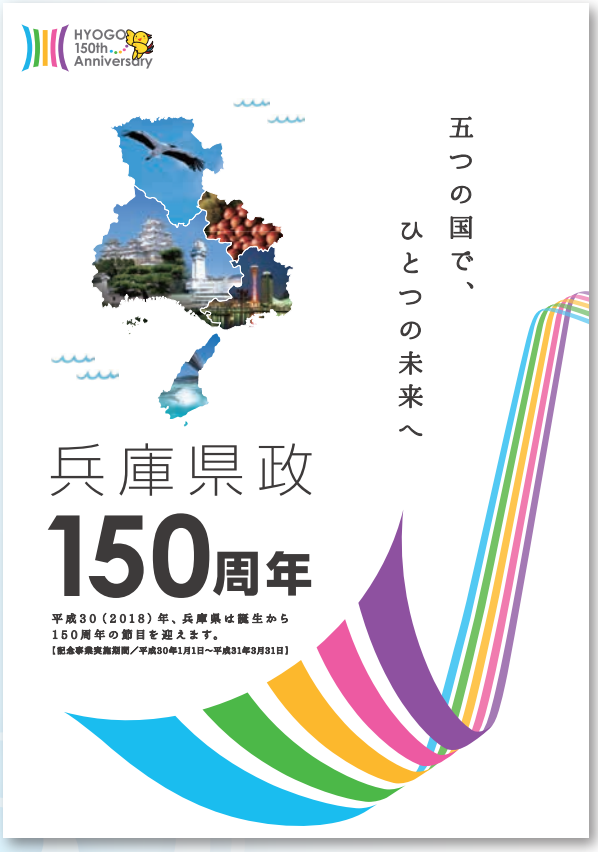
県政150周年 兵庫県「はじまりの地」を歩く

いまから150年前の慶応4年5月23日、西暦（新暦）にすると1868年7月12日、兵庫県が誕生した。「廃藩置県」より3年以上前のことだ。

初代県庁は、現在の神戸市兵庫区南部にあった兵庫城跡に置かれ、初代知事には後に初代内閣総理大臣となる若き日の伊藤博文が就いた。当時はいまの県の姿とは程遠く、県域は開港間もない兵庫津（神戸港）を中心とする摂津と播磨などに点々と散らばっていた。その後、何度も形を変えながら瀬戸内海から日本海まで旧五国が集まる広大な県になっていく。

江戸から明治へ、日本が近代化への道を歩み始めた激動の時代に先人たちはどんな景色を見ていたのだろう。県政150周年に合わせ、兵庫県の「はじまりの地」を歩いた。

（神戸新聞東京支社編集部長　勝沼直子）＝文中敬称略



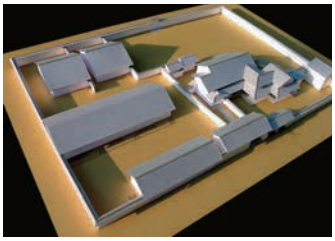
初代県庁の碑

「兵庫城跡・最初の兵庫県庁の地」。その碑は、神戸市兵庫区南部を流れる新川運河沿いに立つ。静かに広がる水面を眺め、150年前、ここ「兵庫津（ひょうごのつ）」が政治、経済、文化の中心地だった時代に思いをはせる。

兵庫津は、古くは「大輪田泊（おおわだのとまり）」と呼ばれた。奈良時代の高僧・行基が築いた摂播五泊の一つとされ、平清盛が改修を施して日宋貿易で栄華を極めた。鎌倉時代以降は「兵庫津」と呼び方を変え、日本国内の東西航路や、外国との交易拠点として栄えた。一帯には豪商や寺社が集まり、18世紀には約2万人が暮らす一大都市に発展したという。

兵庫城は戦国時代に築城され、江戸時代に入ると城跡に尼崎藩の陣屋や幕府の勤番所が置かれた。明治新政府もここに最初の県庁を置いた。県庁は程なく移転。城跡は運河の建設に伴って開削され、姿を消した。これまでの発掘調査で石垣が発見され、東西・南北に140メートルの広さがあったことや、城と堀の位置などが分かっている。

欧米諸国と結んだ修好通商条約で開港が決まったのは兵庫津（港）だったが、政府は中心地の混乱を避けるため、東隣の神戸村に外国人居留地を設けた。その後、港湾、都市機能の中心は兵庫から神戸へと移っていく。


初代県庁の復元模型

兵庫城跡に最初の県庁があったことを示す碑

勤番所を描いた絵図（『神戸古今の姿』から、兵庫県公館県政資料館所蔵）

発掘調査で見つかった石を使い、再現された兵庫城の石垣のイメージ

兵庫津、新時代へ

にぎわいから遠ざかっていた兵庫津地域で、ここ数年、地域の歴史を見直す住民たちの動きが活発になってきた。歴史遺産ツアーや運河でのレガッタなどのイベントが人気を集め、新川運河沿いの約350メートルには散策路「キャナルプロムナード」が整った。昨年9月には中央卸売市場の移転跡地にショッピングモールが開業した。今年5月には、江戸時代に大阪―北海道の交易を担った「北前船」の基地として日本遺産の追加認定を受けた。

初代県庁を復元する構想も動き出している。地元住民の地道な研究・要望活動を受け、兵庫県が150周年記念事業に盛り込んだ。完全な資料が残っていないため、現存する絵図や発掘調査などをもとに最新技術を駆使して、勤番所、同心屋敷などを当時に近い形で復元する。兵庫県の歴史が学べる資料館も併設する計画だ。

「よみがえる兵庫津連絡協議会」の高田誠司会長は「兵庫や神戸のルーツをぜひ見に来てほしい」と話す。時代の荒波を超え、兵庫津は新たな路を開こうとしている。

兵庫津の魅力を語る高田誠司会長

27歳の知事

続いて、初代兵庫県知事、伊藤博文の足跡を神戸の市街地で探してみよう。

まず訪ねたのは神戸・元町の県庁近くにある兵庫県公館。フランス・ルネサンス様式の重厚な建物で、4代目の県庁舎として1902年に建てられ、今は迎賓館や県政資料館として活用されている。兵庫県の歩みを紹介する展示室に並ぶ歴代知事の肖像の先頭を飾るのが、27歳の伊藤だ。

1868年、開港間もない神戸はカオスの真っただ中にあった。

兵庫県誕生の5カ月前、三宮神社前で備前藩の隊列を横切ろうとした外国人に備前藩が発泡するなどして小競り合いとなり、米英兵が上陸して交戦状態となった。明治政府が最初に直面した外交問題「神戸事件」である。イギリス留学の経験を生かし事態の収拾に当たったのが旧長州藩士の伊藤だった。そのまま神戸にとどまった伊藤は兵庫県設置とともに初代知事に就く。事件の顛末を伝える案内板と碑が三宮神社にある。

伊藤の知事在任期間は約11カ月と短い。この間にも、藩の廃止や外交の重要性など6項目を説いた「兵庫論」と呼ばれる建白書を政府に提出している。兵庫・神戸に身を置きながら、日本の将来を見据える若き政治家の志が伝わってくる。

伊藤博文と神戸

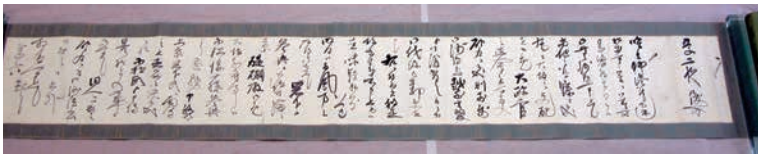
かつて伊藤の銅像があったという神戸市中央区の高台、大倉山公園に足を延ばした。いまも残る石造りの台座は約9メートル四方、高さ約6メートル。この上に高さ約3メートルの銅像が立っていたという。当時は神戸港に入る船からもその偉容が見えた、と伝わる。

実は、ここにあった伊藤像は2代目だ。初代は1904年、大倉山のふもとにある湊川神社に設置され、翌年には日露戦争の講和条約に不満を持つ民衆に引き倒された。当初、東京の政財界有志が神奈川・大磯の伊藤邸に建てようとしたが、本人の希望で湊川神社の境内になったという。知事を辞し、首相を4度務めた後も伊藤が兵庫、神戸の地に愛着を持ち続けていたことが伝わるエピソードだ。

完成直前の伊藤博文像。フロックコート姿で自身が起草の中心となった帝国憲法草案を手にしていた（『故伊藤公爵銅像建設顛末』から、神戸市立中央図書館所蔵）

知事に着任した頃の伊藤博文（「伊藤博文伝」上　兵庫県公館県政資料館所蔵）

残された台座＝大倉山公園



兵庫県が設置されたことを伝える伊藤俊介（博文）書簡（1868年5月26日、東條慶次あて　兵庫県所蔵）

伊藤は1909年、暗殺された。その2年後、親交のあった大倉財閥創始者・大倉喜八郎が大倉山に再建し、神戸市に寄付したのが2代目だ。この像も太平洋戦争中の金属供出で姿を消し、台座だけが残った。伊藤像の数奇な運命が激動の歴史を物語る。

初代・伊藤の後も、外務大臣として不平等条約の解消に奔走した陸奥宗光（4代）、全国に先駆けて地方民会（議会）を開設した神田孝平（7代）ら歴史に名を残す政治家が創生期の兵庫で知事として舵取りを担った。

早くから開かれた神戸港と旧五国の多様性を併せ持つ兵庫県。困難な時代に挑み、未来を切りひらく存在であれ―。そんなエールが聞こえてくるような気がした。

「神戸事件発生地」を示す碑と案内板＝三宮神社

新緑に覆われた県公館

発祥の地 あれこれ

映画にジャズにゴルフ…。開かれた港を持つ神戸には海を越えて新しい文化が集まり、全国に広がっていった。街を歩くと、ほかにも「神戸発祥」を伝えるユニークな記念碑に出会える。

▼ボウリング発祥・記念碑（東遊園地）
神戸市役所の南側に広がる東遊園地。神戸開港間もない1869年4月、外国人居留地の一角でもあったこの公園内に、ボウリング設備のある「THE・KOBE・CLUB」が誕生した。
碑は1989年、ボウリング発祥120周年と神戸市政100周年を記念して建てられた。木立に囲まれた公園の奥にあり、黒い球体が半分だけ顔を出す。

▲日本近代洋服発祥の地（東遊園地）
東遊園地の入り口付近に御影石を組み合わせた巨大なモニュメントがある。洋服のパーツの型紙をイメージした現代彫刻で、神戸洋服商工協同組合が明治政府の洋服着用太政官発令（1872年）から100年を記念して彫刻家グループに制作を依頼した。
神戸初の洋服店は1869年、居留地・番館で英国人カペルが開業した。カペルに弟子入りした日本人最初のテーラー柴田音吉は元町で開業し、明治天皇のお召し服や伊藤博文らの洋服を仕立てたという。

▼日本マラソン発祥の地（神戸市役所前）
1909年、神戸・湊川埋め立て地（現在の兵庫区新開地）から大阪・西成大橋まで31.7キロを走る「マラソン大競争」が行われた。日本でマラソンの名称を使った初めての大会とされ、20人が出場した。それから100年余りを経た2011年11月、「第1回神戸マラソン」が開催され、今では毎年2万人が参加する。5人のランナーをくりぬいた石碑は、神戸マラソンのスタート地点となる神戸市役所前に第1回大会を記念して建てられた。

▲八時間労働発祥の地（ハーバーランド）
「働き方改革」の原型は100年前の神戸にあった？
8時間労働制を日本で最初にもたらした労働争議が1919年秋、神戸の川崎造船所で起きた。賃金増額を求めるサボタージュ闘争は約10日間続き、当時社長の松方幸次郎が8時間労働制導入などを提示して解決した。反響は大きく、全国で労働時間制限の動きが広がったとされる。
鏡が渦巻くようなオブジェは海沿いの遊歩道に立ち、対岸に旧川崎造船所（現川崎重工業）を望む。

兵庫県のなりたち

兵庫県ははじめからいまの形をしていたわけではない。明治新政府は旧幕府領を接収して府・県とし、1868年、兵庫津周辺の幕府領を管理する第1次兵庫県（図①）が誕生した。このときの兵庫県はいくつもの飛び地からなり、今の兵庫県域は大名が治めていた藩や旗本領が複雑に入り組むモザイク模様のようだった。

1871年、廃藩置県を経て府県統合が行われ、第2次兵庫県（図②）が成立した。現在の兵庫県域は兵庫・飾磨（播磨全域）、豊岡（但馬・丹後全域と丹波の一部）、名東（淡路・阿波）の4県に再編され、摂津の西部を管理する兵庫県は飾磨・豊岡両県に比べてまだ小さい県だった。

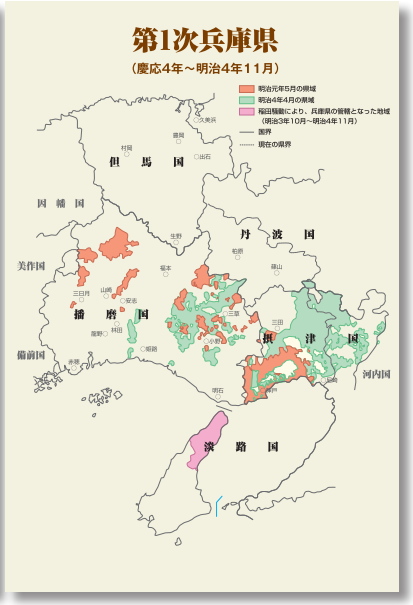
さらに全国府県の統合は進み、1876年、飾磨県と豊岡・名東両県の一部が兵庫県に併合され、ほぼ現在の県域が確定した。これが第3次兵庫県だ。（図③）

誕生から十年足らずで全国に類をみない巨大県となった背景には、兵庫港を重視する内務卿大久保利通と、内務省局長などを務めた出石出身の桜井勉のやりとりがあったとされる。桜井は豊岡と鳥取の統合について意見を求められた際、「豊岡、鳥取両県は歴史的に関係が深いが往来する山間部の交通が不便だ。かといって豊岡を兵庫と統合すると面積が大きくなりすぎる」とし、豊岡と飾磨の合併を進言した。ところが大久保は「開港場の兵庫県が貧弱であってはならない」と再考を求め、導き出されたのが豊岡と飾磨、淡路まで兵庫県に合併してしまう案だったという。ここに五国から成る「大兵庫県」の源流があった。

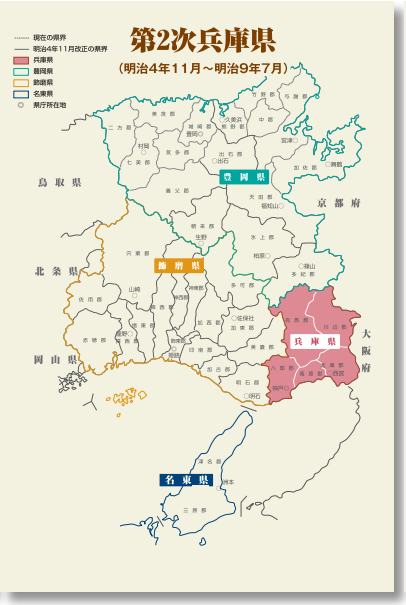
県名にも、開港場を重視する政府の姿勢がみてとれる。地名の「兵庫」は、その昔、兵器を収めた倉庫が置かれたことに由来する。開港場として重要な場所でもあった兵庫に明治政府が最初の県庁を置いたため、地名がそのまま県名になった。

1858年に交わした日米修好通商条約で約束された開港場は、兵庫（神戸）のほか函館・新潟・神奈川（横浜）、長の五港。これを引き継いだ明治新政府が「外国に開かれた土地」を印象づけるために、条約上の開港場を県名にしたとの説もある。神奈川県が鎌倉県や横浜県でないのも兵庫と同じ事情と考えられる。

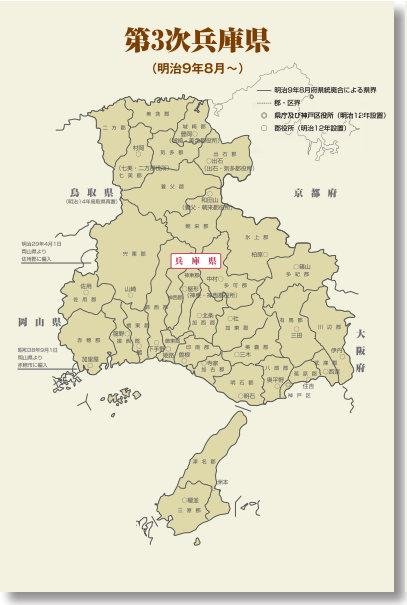
※参考・引用文献
「ひょうご全史　ふるさと7万年の旅」上・下（神戸新聞兵庫学取材班・編）
「兵庫県庁発祥の地記念事業検討委員会報告書」（2018年3月、同委員会）



（図①）



（図②）



（図③）

兵庫県の歩み

1868（明治元）年	兵庫裁判所を廃止、兵庫県を設置（第１次兵庫県）。初代知事に伊藤博文
1871（明治４）年	廃藩置県で摂津西部を兵庫県に統合（第２次兵庫県）
1874（明治７）年	神戸―大阪間に鉄道仮営業
1876（明治12）年	飾磨、豊岡、名東の各県を兵庫県に編入（第３次兵庫県）
1888（明治21）年	山陽電鉄（神戸―兵庫間）が開通
〃	兵庫県内で初めて神戸に電灯がつく
1889（明治22）年	市制・町村制により、２市26町402村に
1925（大正14）年	北但大震災
1926（大正15）年	阪神国道（現国道２号）開通
1931（昭和６）年	姫路城を国宝に指定
1938（昭和13）年	阪神大水害
1939（昭和14）年	大阪第二飛行場（現大阪国際空港）開港
1941（昭和16）年	太平洋戦争始まる
1945（昭和20）年	空襲で尼崎、芦屋、神戸、明石、姫路などが焼ける
〃	終戦

1947（昭和22）年	第１回知事選挙実施
1952（昭和27）年	コウノトリを特別天然記念物に指定
1962（昭和37）年	20市77町となり、日本で初めて村のない県に
1963（昭和38）年	日本初の高速自動車道、名神高速道路（尼崎―栗東間）開通
1972（昭和47）年	山陽新幹線開通
1993（平成５）年	姫路城が世界文化遺産に登録
1994（平成６）年	但馬空港開港
1995（平成７）年	阪神・淡路大震災
1998（平成10）年	明石海峡大橋完成
2006（平成18）年	神戸空港開港
〃	「のじぎく国体」「のじぎく兵庫大会」開催
2007（平成19）年	丹波市で１億２千万年以上前の恐竜化石発見
2010（平成22）年	関西広域連合設立
2018（平成30）年	県政150周年